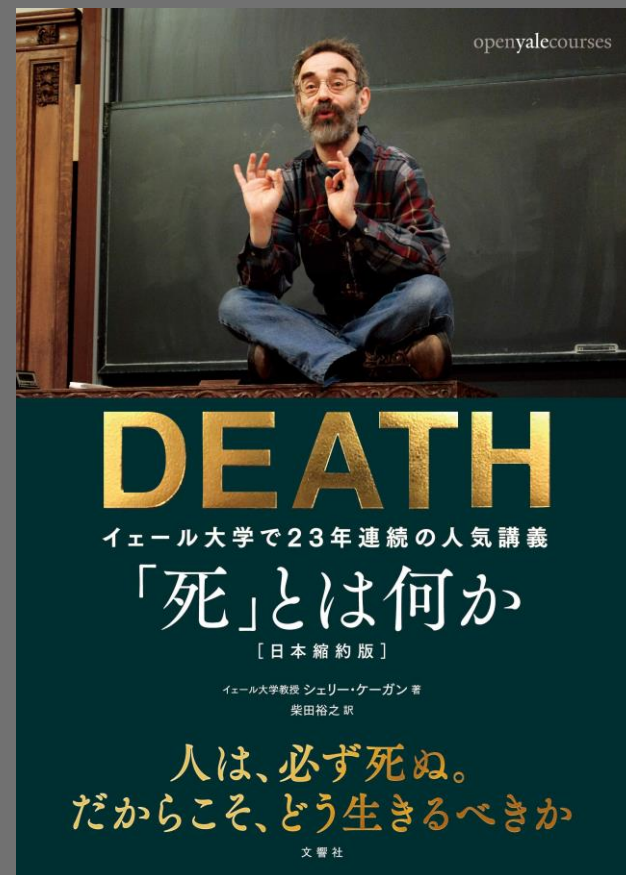


# 俺ら30代だし終活しようぜ！

## DEATH 「死」とは何か

人は、必ず死ぬ。  
だからこそ、どう生きるべきか



どのような生き方をすべきか？ “誰もがやがて死ぬ” ことがわかっている以上、この問いについては慎重に考えなければなりません。

どんな目的を設定するか、どのように目的の達成を目指すか、念には念を入れて決めることです。

もし、死が本当に “一巻の終わり” ならば、私たちは目を大きく見開いて、その事実直面すべきでしょう。

自分が何者で、めいめいが与えられた “わずかな時間” をどう使っているかを意識しながら。

Yale University, Clark Professor of Philosophy

Shelly Kagan

「死」をよく考えることは、人生をどのように過ごしたいということにつながる。漠然と「死」を恐ろしい、悪いものだと思わず、自身の死生観を確立することでよりよい人生を過ごしましょう。

第1講 「死」について考える

日本の読者のみなさんへ

第2講 死の本質

~~第3講 当事者意識と孤独感——死を巡る2つの主張~~

第4講 死はなぜ悪いのか

~~第5講 不死——可能だとしたら、あなたは「不死」を手に入れたいか？~~

第6講 死が教える「人生の価値」の測り方

~~第7講 私たちが死ぬまでに考えておくべき、「死」にまつわる6つの問題~~

~~第8講 死に直面しながら生きる~~

~~第9講 自殺~~

# 「死」について考える

人生にたった一度しか経験することのない「死」。これについて考えることはほとんどなく曖昧模糊としたイメージしかないのではないだろうか。

**「死」とは何なのか。**

**「死」とは悪いものなのか。**

**我々は死後も存在し続けるのか。**

これを考えることで、対極にある「生」を考えることにつながるのではないか。

**我々は何者なのか。**

**我々には魂があるのか。**

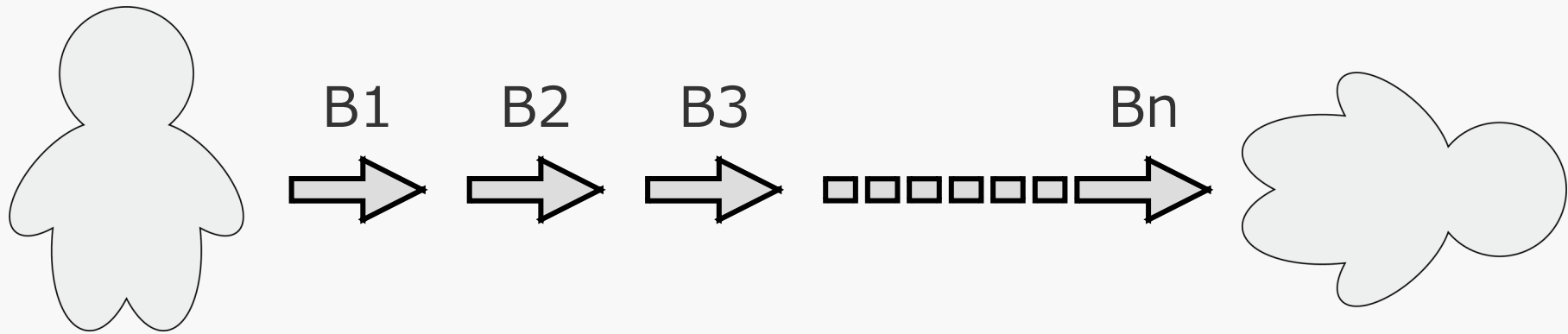
哲学的観点から、宗教的観点を排し、生命や死の価値に関して考察してゆく

日本の読者のみなさんへ

## ～二つの死生観、および魂の存在、人格の同一性について～

### 「死」とは何なのか。

例えば交通事故にあって死んだとき。人が死ぬのは、「事故にあったとき」、「心臓が止まった時」、「呼吸が止まった時」、「脳が停止した時」。一体どの瞬間が「死」なのだろうか。



死の発端となるイベントをB1とし、すべての肉体の機能が停止するまでのn回のプロセスを「**身体之死**」と考えると説明しやすい。

日本の読者のみなさんへ

～二つの死生観、および魂の存在、人格の同一性について～

## 二つの人間の定義と死

### 二元論



身体と魂が相互作用することで「生」をなす

**魂は不滅、かもしれない**

### 物理主義



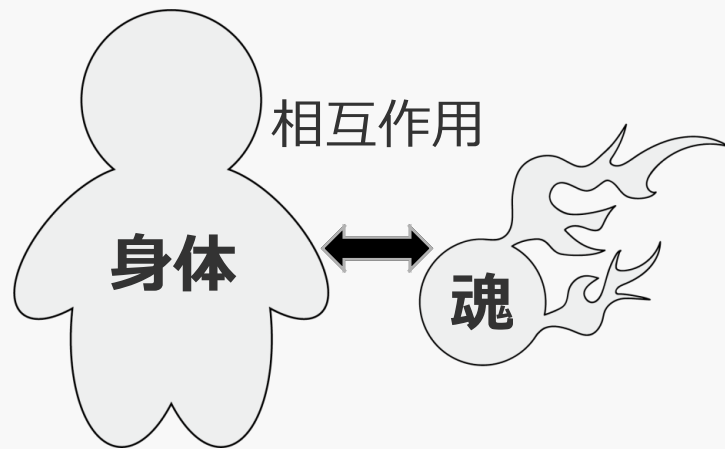
人間は複雑な機能を持つ身体であり、精神や心はその機能の一部である

**死はまさに終わり**

日本の読者のみなさんへ

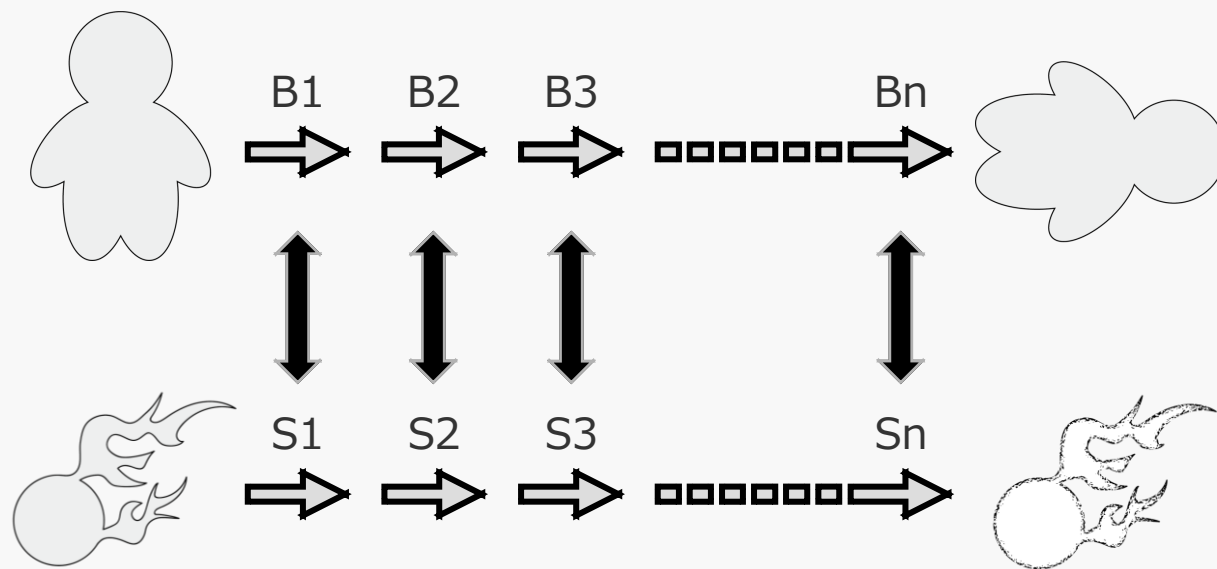
～二つの死生観、および魂の存在、人格の同一性について～

## 二元論における魂の不滅性の否定



魂から身体へ行動を、  
身体から魂へ感覚を

身体と魂は連動している



死に内包されたプロセスも魂に同期され、  
最終的に魂の消滅につながる

物理主義的考えが妥当だと考える

日本の読者のみなさんへ

～二つの死生観、および魂の存在、人格の同一性について～

## 物理主義における「人間」「心」「死」



「人間」とは特定の機能を備えた肉体にしか過ぎない

↳ **P (Person) 機能**

思考や意思疎通、感情や感覚はP機能に含まれる知的能力の産物であり脳が作る機能である、  
「心」とはそれらを総合して語る方便である。(様々な能力を統合した高次の能力)

**物理主義の観点からの「死」とは**

**P機能が終わることに他ならない**

ぶっちゃけ有機物でできた機械ってことだね。  
ちなみに脳の容量は150 TBらしいよ



# 死の本質

「生」とはP機能と身体があるということ…では「死」とは？

わけてみる…



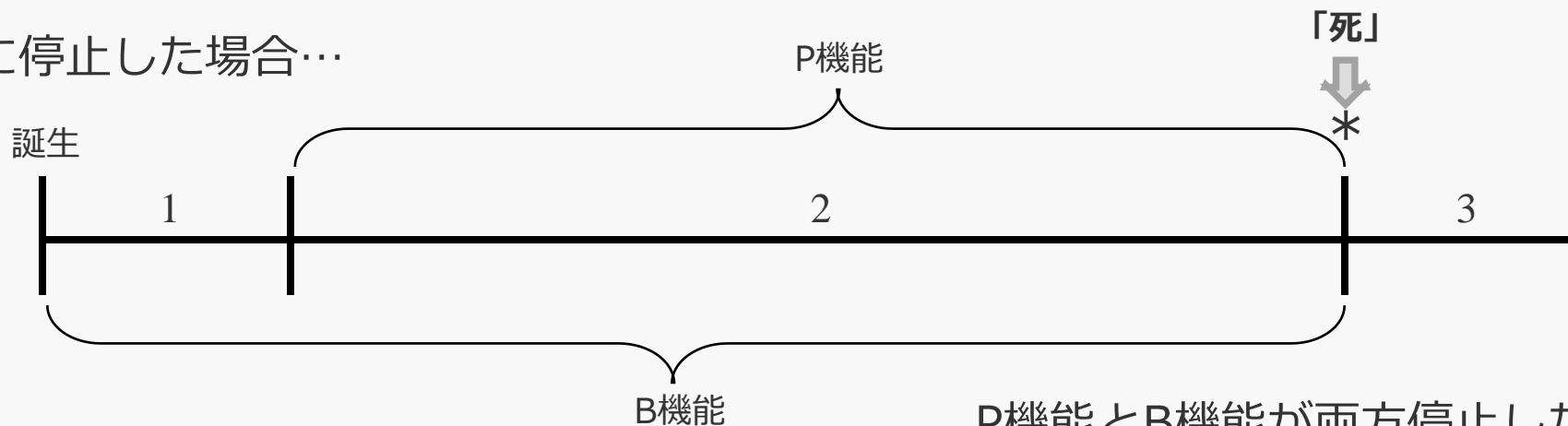
## P (Person) 機能

人間としての知的能力や意識など、能力の総称

## B (Body) 機能

血液循環や心肺機能など、無意識で生じる生命活動の総称

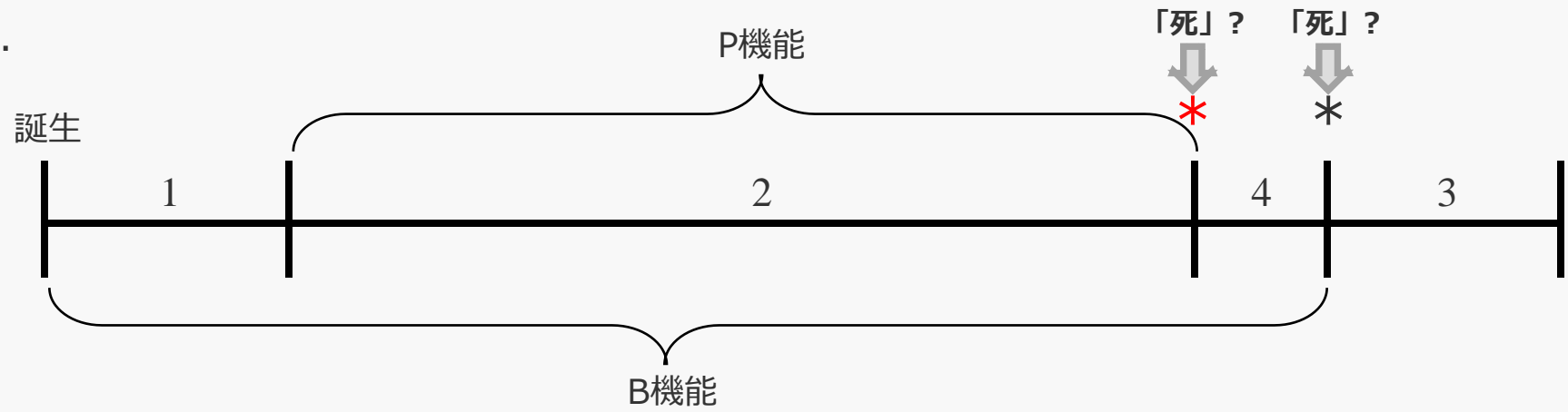
同時に停止した場合…



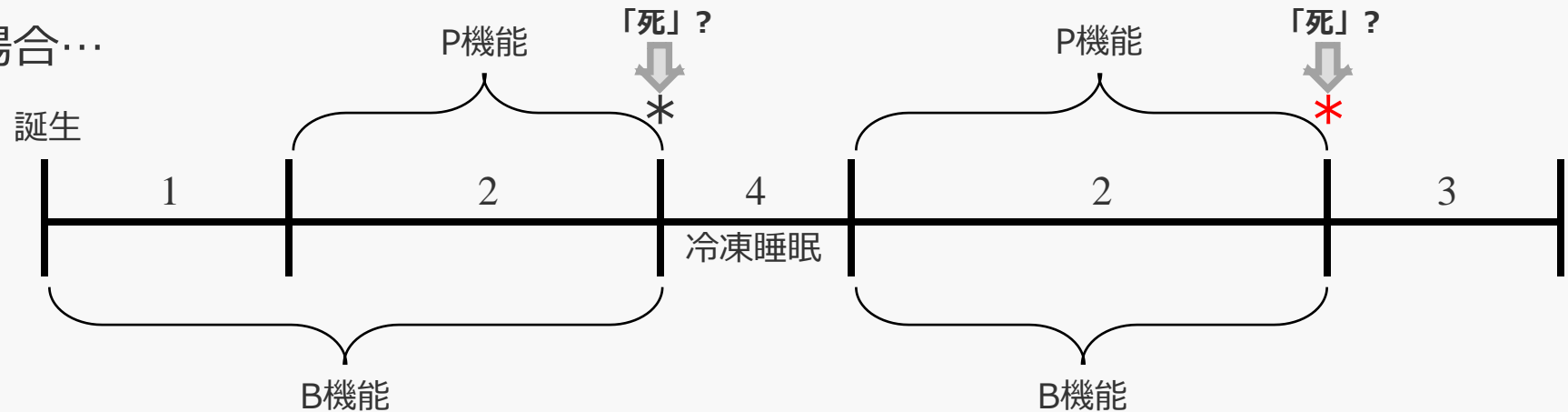
P機能とB機能が両方停止したら「死」…？

# 死の本質

脳死の場合…



冷凍睡眠の場合…



「死」とはP機能を果たすことができなくなった時であるといえる

# 死はなぜ悪いのか

なぜ我々は「死」を悪いものとするのか。そしてその直感は当たっているのか

魂の存在



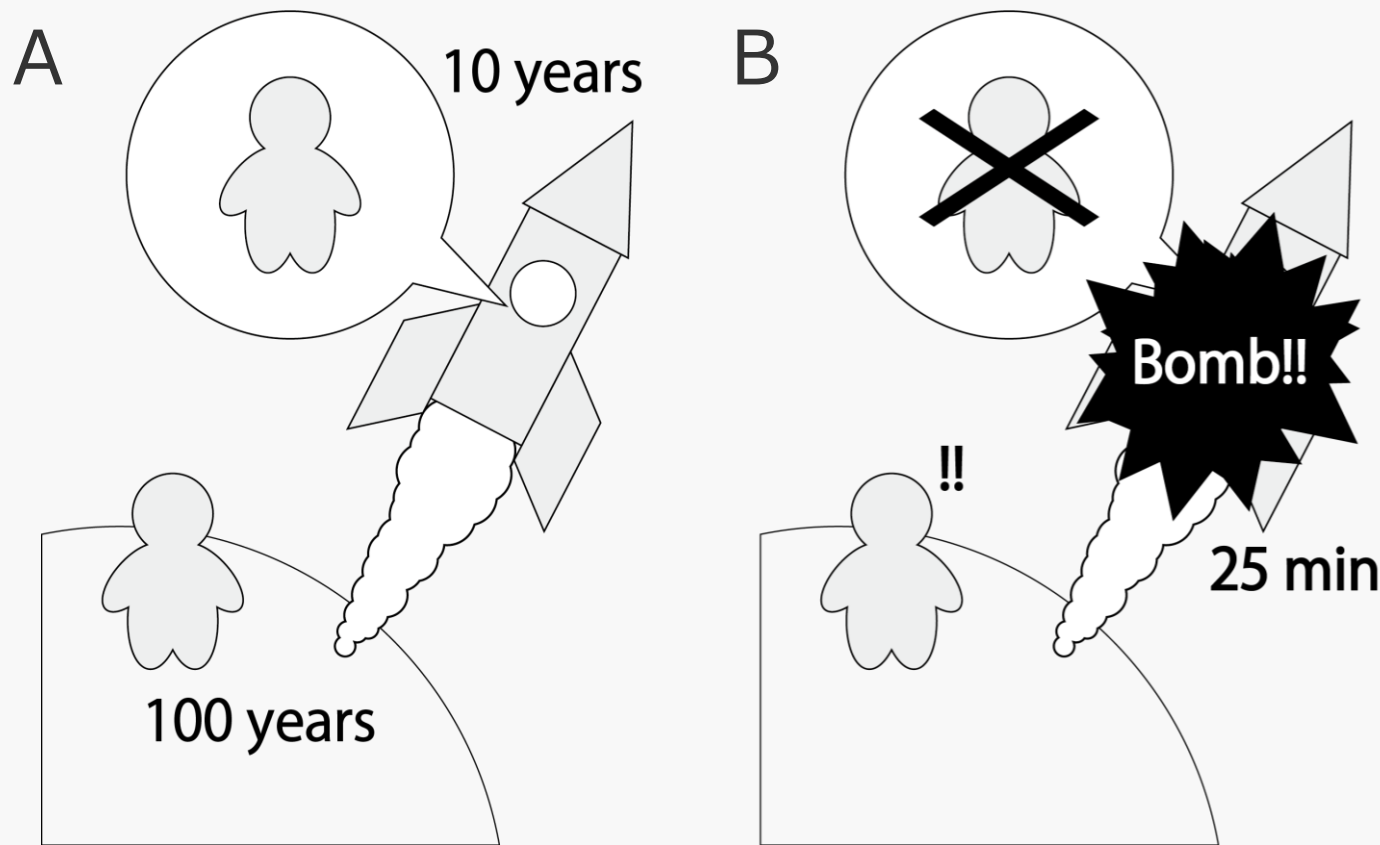
Yes…> 天国や地獄など、死後の不安からくる「悪」の感情。(二元論)

No…> 人格の消失後、無いものに善悪の判断は不要である。(物理主義)

そう、「死」は悪いものではなく、単なる現象である。

# 死はなぜ悪いのか

死は残されたものにとって「悪い」？



状況は同じだが、  
Bの方が「悪く」感じる…

それは死んだ人にとって悪いだ  
ろうと勝手に判断しているから

「死ぬ人にとって死が悪いかな否か」を考える必要がある

# 死はなぜ悪いのか

そもそも物事が「悪い」とは、どのようなことだろうか

1. **直接的影響**: 苦痛や損失を伴う場合
2. **間接的影響**: 二次的に 1 を引き起こす場合
3. **相対的印象**: 何かを得ることで、得られなかったものが得たものより良い場合

死によって得られるはずだった人生、あるいは幸福が失われることが悪い？

これを「剥奪説」と呼ぶ

検証しましょう

# 死はなぜ悪いのか

剥脱説は正しいか？

形而上学的には

「もし何かが真であれば、その何かが現実である時点が存在するはず」

「死が悪である」とすれば、それはいつなのか？

1. 私が生きているとき、私は死んでいないので死の悪如何は議論できない
2. 私が死んでいるとき、私は存在していないので悪いことなど何もない

ある人にとって何かが悪いことであり得るのは、その人が存在しているときのみである

(ギリシャの哲学者 エピクロスの言葉より)

➡ 「存在要件」と呼ぶ

# 死はなぜ悪いのか

## 存在要件と「死による非存在＝存在の剥脱」という剥脱説の対立

矛盾しているように見えるが、非存在に存在要件が適応できれば「死＝悪」といいうる。

- ・ 非存在＝悪という価値観の不都合

	卵子	精子
人、一人が生じる組み合わせ	${}_1C_1$	${}_{3 \times 10^8}C_1$

逆を見ると、それ以外は全て存在可能性を剥脱された「非存在」である

とんでもない道徳的大虐殺たりえるのだ…

# 死はなぜ悪いのか

## 存在要件の解釈の改変

剥脱説と存在要件を両立させ、死を悪だと認定するために

**ある人にとって何かが悪い事足りえるのは、  
ある人が「いずれかの時点」で存在しているときだけである** でしょう

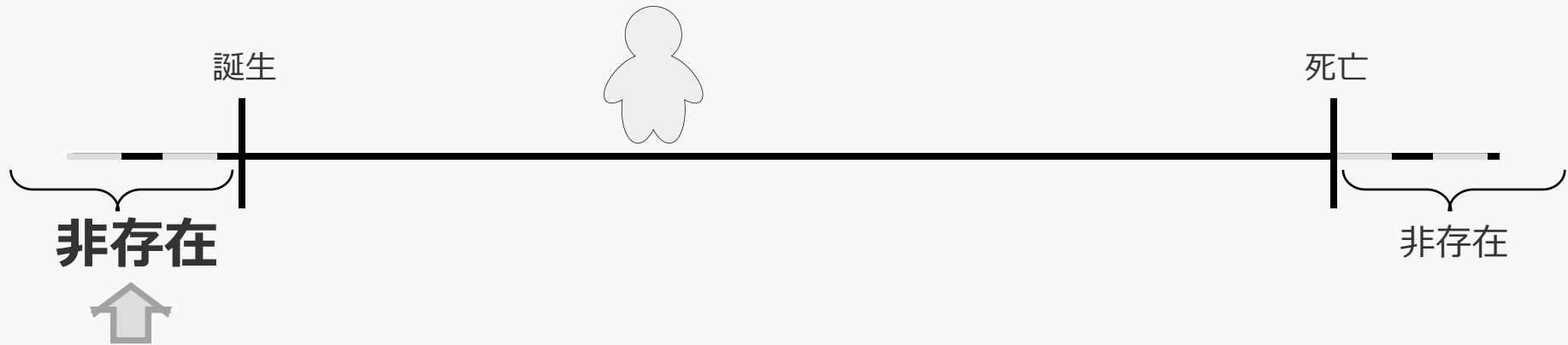
産れてこなかった子供はいずれの時点でも存在していないため、非存在が剥脱説的に悪とならない

一見、筋が通っているようだ



# 死はなぜ悪いのか

## 剥脱説のもう一つの難問 (ルクレティウスの主張)

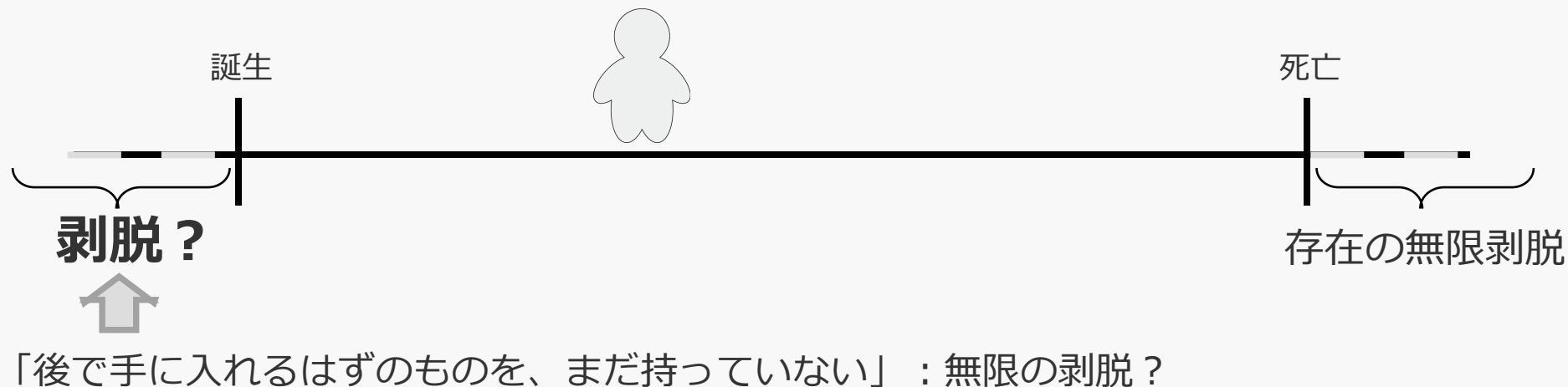


「生前の非存在を残念がるものはいないのだから、死後の非存在を残念がることは無い」

1. ルクレティウスに同意し、死は悪いものではないと考える
2. 生前と死後の非存在には同意するが、両方の相は悪いものとする
3. 生前と死後の非存在は価値が異なり、死後のみ悪いものとする

# 死はなぜ悪いのか

## 生前と死後の非存在期間の価値の差異



## 未来志向が価値観を変える

痛みは過去のものにしたがり、未来に起こることの方が気になる  
つまり、未来と過去の価値は異なるとするのが妥当かもしれない

こちらに関しては「**生前と死後の非存在は価値が異なり、死後のみ悪いものとする**」とするのが妥当か

# 死はなぜ悪いのか

## シェリー先生の結論

剥脱説を支持し、「死は機会損失の点で悪い」と考えたい。

しかし、剥脱説が「死＝悪」であることを完璧には説明できないこともわかる。

哲学的に「死」の善悪を説明することは、まだできていない。それでも真摯に向き合い考えることで、自身の「考え」を持つことが重要ではないだろうか…

# 死が教える「人生の価値」の測り方

死が悪となりうるのは、良い機会が奪われるからだという前提だった  
では逆に残された人生がマイナスのものであれば、死は良いものとなりえるだろう

- ・ 現在、そして予測的に人生の質を判断する必要がある

## 人生の良し悪しは何によって決まるのか



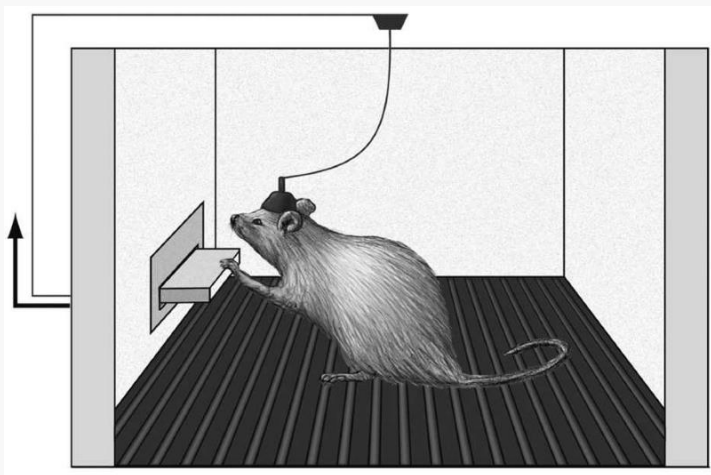
本質的に良いもの(快感etc)と悪いもの(痛みetc)に注目する必要がある

# 死が教える「人生の価値」の測り方

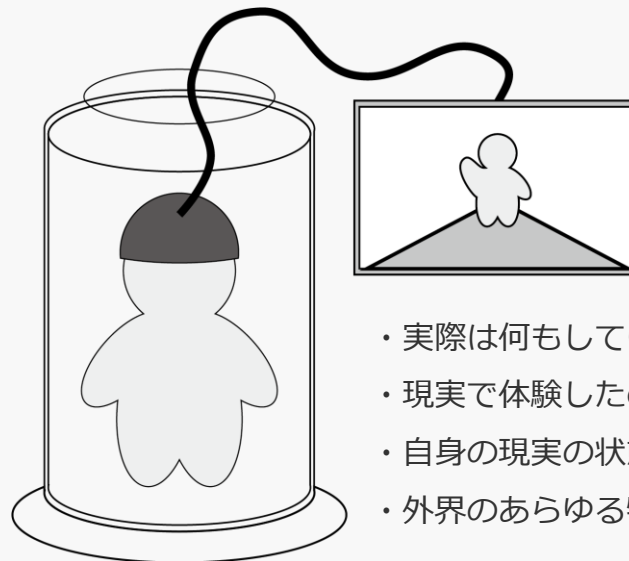
## 本質的に良いもの、悪いものとは (快楽主義)

良いもの→快感、悪いもの→痛み それ以外はあるだろうか

**快楽主義**：良いもの→快感、悪いもの→痛み のみである



ラットの脳に電極を付けて、レバーを押すと電気信号が流れて快感が生じる



疑似体験によってあらゆる体験を脳内で体験できる。

- ・実際は何もしていない
- ・現実で体験したのと同じ感覚を得られる
- ・自身の現実の状態は自覚していない
- ・外界のあらゆる物事は心配しなくてもよい

**快楽だけでは人生の質を語るできない、何かが欠けている**

# 死が教える「人生の価値」の測り方

## 完璧な人生に欠けているもの

- |                                                                                                                    |   |                |
|--------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|---|----------------|
| <ul style="list-style-type: none"><li>1. 何一つ、残せる実績がない</li><li>2. 自己についての知識がない</li><li>3. 愛情に満ちた関係に属していない</li></ul> | } | 経験ではない、価値のあるもの |
|--------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|---|----------------|

**最高の人生には、経験、つまり「内面的な」良い事だけではなく、  
「外面的な」良いことも欠かせない**

人生の良し悪しを問うとき、なるべく丁寧に「良い事の総和」から「悪い事の総和」を引く。  
これによって人生の全体、あるいは部分部分の両方について最善の推測に基づく相対的評価が得られる。

# 死が教える「人生の価値」の測り方

## あなたの人生はプラスとマイナスどちらに触れる

良い事の総和から悪い事の総和は、人によって異なるが、一方で人類全体に一般化できる。

1. 楽観主義者 : 人生は常にプラスであり、生きる価値がある
2. 悲観主義者 : 人生は常にマイナスであり、生まれてくることは不幸である
3. 穏健派 : 人生はその時々でプラスとマイナスがあり、一概に幸不幸は言えない

共通見解: 人生の価値は「中身」に依存するものであり、「器」＝「人生そのもの」は無価値である

## 「ニュートラルな器説」と呼ぶ



## 「価値のある器説」＝人生そのものに価値があると考えられる

草木とは異なり、「人格をもった人間としての人生」に価値が存在している

# 死が教える「人生の価値」の測り方

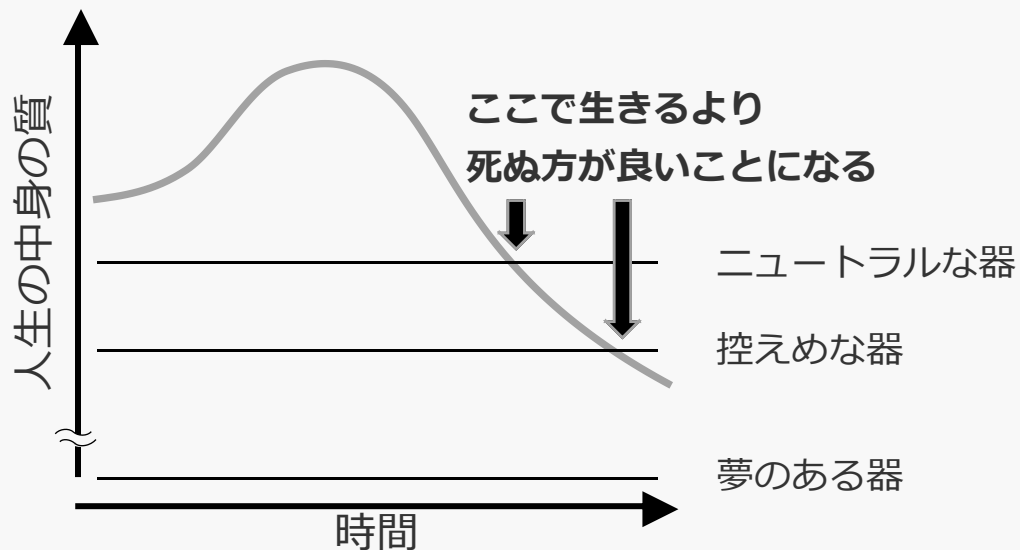
## ただ生きているだけで生じる価値とは

価値のある器、人生そのものに付属する価値はどのように判断するか

1. 控えめな器説 : 人生の中身と同程度のオーダーになり、総和がマイナスになることもある
2. 夢のある器説 : 人生の中身が常にマイナスであっても、総和がプラスになる

後者は信じている人は少ない

## そしてまた「なぜ死は悪いのか」を問い直す



人生の価値が決まれば、どの時点で死の良し悪しが反転するか判断することができる

⇒ 死の価値が決まる



# これから生きる君たちへ

「生と死」に対する見方を変える

魂の存在、不死の可能性と憧れ、人生のすばらしさを信じ、死は一卷の終わりであり、恐怖し不安にとらえること。



魂は存在せず、我々は感情を持つ機械でしかない。死とは機械が壊れ、再び動くことがなくなることに等しい。

より冷静に正確に「死」についてい考えることができるようになる

「死」はそれでも災いであり、良いものではないかもしれない。しかしそうであれば「**我々がこれまで、そしてこれから生きてゆくことは正に幸運であること**」に気づき、価値のある人生を生きることにつながるのではないだろうか…